

研究の棊

日本古建築研究の棊 (第三十八回)

天 沼 俊 一

第三十五 須彌壇及臺座(中の上)

鎌倉時代

になると、須彌壇も亦建築と同じ様に複雑化して、中平安時代迄のやうに簡單ではなくなつてきた。それは唐様が入つてきて、和様との折衷様のができたためである。天竺様のがあつたかどうか、それはよく判らない。東大寺開山堂の良辨僧正の入つてゐる厨子の乗つてゐる八角形のものが、いはゞ唯一のものであらう。併し私は、それを以て天竺様といひ得ると確言はできない(次號か又は次次號)に詳記するつもり)。けれども天竺様と認められるのは、後にも先にもあれつきりの様である。

鎌倉時代のものがはつきり判つてゐれば、あとは大概見當がつかぬことはないやうである。そこで當代のは割合に詳しく記載してみやうと思ふのである。それには順序として和様から始める。

和様須彌壇

いふ迄もなく、鎌倉時代に始まつたのではないけれども、便宜こゝで分類を試みる。

和様の壇は上下に框を置き、其間を束を以て若干——多くは等間隔——に分ち、各區劃内の羽目板は

無地のもの。

額縁のみ入つてゐるもの。

額縁内に横又は縦連子(言と然らざるとあり)入のもの。

格狭間入のもの。

格狭間内に連子を入れたもの。

格狭間内に植物を入れたもの(多くは蓮。花を拵く)。

格狭間内に動物を入れたもの(獅子・孔雀等)。

等で、さうしてこの格狭間には少なくとも二種の形式がある。

又框が上・中・下とでもいふのか、三つあるのがある

(金剛輪寺本堂・寶幢寺本堂・慈眼院多寶塔等)。この様な場合も亦、同じ様に束

で其間を分けるから、四角な場所が上下にできる。そ

こで其中に格狭間や連子を入れるが、どちらが上とい

ふやうな規則はないやうである(次號に圖示す)。

稀に普通の壇上に更に薄き同じ大きさのものを置き、

下に格狭間を入れ、上に出繋ぎの組子を入れたのがあ

る(西明寺本堂)。此も亦前に記したものの、中に入れること

ができるかも知れぬが、とにかく珍らしいものである。

形は殆んど總て長方形で、正面は廣いが、塔等の場

合は正方形のものもある。最も稀に圓形のも見出される

(淨土寺淨土堂)。

* * * * *

大體これ位であらう。上下(又は中)の框及其間の束は大

概四角で、下框及上框は夫れく上及下、中框のある場

合は上下、束は左右(隅東は多く對角線の方向)に直角に切込んだ面を

取つてあり、黒漆塗で面は朱漆塗を普通とするが、時

には螺鈿を入れて美事に裝飾したのもある(當麻寺金堂淨妙寺本堂)。

金銅飾金具を打つたのは割合に多く、大部分は其面に特

有の蓮唐草を刻してあるが、勿論また無地のものもある。さ

うして其金具の猪の目は、殊に小さくつぶれた様なのが

特徴である。鎌倉時代に入つてからは、建物は特別の場

合を除き、内陣も總て床が貼つてあつたのだから、須彌

壇も石製のはなかつたといつてよろしい。萬一床をばら

ぬ時でも、唐様と同様に木製であつたやうである。

本號には單層——といつてい、かどうか知らないが、

框が上下にあるものを假にかう名づけておく——須彌壇

で、羽目板には主に連子と格狭間と入つたもの、うち、

格狭間は普通の形のもの、即ち前代又は前々代のを繼承

せる形のものに就てのみ記し、もつと形の込み入つたものは、次號に譲ることにした。

* * * * *

第三七七・三七八・三七九圖は、大和當麻寺曼荼羅堂のもの。先づ第三七七圖から解説するが、此こそ全く法界寺阿彌陀堂の系統(第三七四圖①・②)たる事一見明らかである。

上下の框及束、羽目板内の横連子の額縁の四隅に螺鈿を入れてあること、此方面に少しく趣味をもつてゐる人は誰でも知つてゐるであらう。此は淨妙寺本堂の須彌壇(和歌山縣有田郡箕島町小豆島)と共に頗る有名なものである。

此螺鈿は丁度飾金具に相當するので、其代りに用ひてあるのである。圖は正面に向て右手のものが、此少し左に例の「寛元元年五月日」の銘文があるけれども、之れは此圖には見えてゐない。壇上の勾欄も同時のものとして認められるが、飾金具は天正年間のもので、四隅の擬寶珠と共に、遙に時代は後れてゐる。

然るに横連子の入つてゐるのは正面だけで、あとは第三七八・三七九圖の如く格狭間入である。其形も平安を

飛ばした奈良の式、即ち三月堂八角二重の下壇羽目板にみる如く(第三七一圖③・④)中央から左右に離れてゐる。須彌壇のみでなく、其上中央に安置せる曼荼羅の厨子も亦この種で、時代の割に珍しい手法といへる(第三七八圖に其の一部がでてゐる)。

第三八〇圖は奈良市を東に距る約三里、忍辱山圓成寺本堂のもの。あの本堂は以前に造りかへてしまつて、いけなくしたが、内陣柱等には立派な繪が残つて居り、中央に此須彌壇をおき上に厨子があり、其内には飛天光の丈六彌陀坐像(寶圖)を安置せる大々的優秀品である。故に内陣の中央は大したものである。須彌壇は圖でみる如く甚だ簡單だが、格狭間は頗る上等で、これ位なら平安末としても大して差支はない位であるといへやう。

第三八一圖は奈良市中院町、極樂院本堂のであるが、此堂内部柱の一(向て右方の前かど、内)に、沽却家地新訴券文事と題し、文永二年三月廿二日の銘ある一文をきりつけてあるから、はつきり判らないが、此柱が他の建物に用ひてあつたのをもつて來なかつた限りとにかく文永よりは早いとして差支はあるまい。鎌倉初期の建物ではない

かと思はれる。

此も羽目板に格狭間が入れてあるが、上下の樞が少しばかり念入で、たゞ上と下とに四角な樞があるばかりでなく、少しく繰形も入つてゐるし、又其上の勾欄も特殊の形をしてゐる。勾欄には一切觸れずにおく筈で、當麻寺曼荼羅のも何もかゝずにおいたのであるが、此はほんの數行ばかり記してゐる。即ち地覆は途中でできれ、束は四角な棒で吹寄となり、其上の架木か平桁か或は一本で兩方を兼ねてゐるのか、この水平におかれた木は、鼻が此時代の臺股の脚そつくりの形をしてゐる。

そこで此を如何にみるかが問題である。須彌壇といひ勾欄といひ此場は簡單に前代の繼承ですましておく事はできかねやう。然らば時代が進んできたので漸く巧者となり、この様な形式を案出したとするのも一つの見方であるが、後に述べるやうに、同じやうな繰形を上下にくり返すのが、謂はゆる唐様須彌壇の性質とするならば、さうして尙ほ其上に勾欄架木の先が蘇手の如くに巻き上げるのが、其特徴の一つとするならば、これには幾分其式

が混じてゐるとか、其影響が現はれてゐるとか、さういふ風に考へる方がいゝやうに思はれる。

羽目板一ぱいに刻んだ格狭間の中に、大きく蓮花が描いてある。これは當代によくやつたことである。近江にある石塔臺座の格狭間の内に、この様に大きくはないが、横向きの蓮花を陽刻した例は決して珍しくない。鎌倉初期の須彌壇としては、さういふ點に於いて可なり珍しいものといへるのである。

第三八二・三八三圖は藥師東院堂のもの。堂は弘安八年にできた事は確かであるから、須彌壇も亦同時とみて差支はない。どこからどこまで最もよく和様を現はせるもの、一つで、須彌壇も勿論さうである。但し上下の樞に打つてある飾金具は後のもの(江戸時代)たる事實に明々白々である。羽目板の格狭間の形が大に参考になるから、眞正面からとつた寫眞を向ひ合はせに第三八三圖にだしておいた。これなら圖にかいたより精確に現はし得たと思ふ。

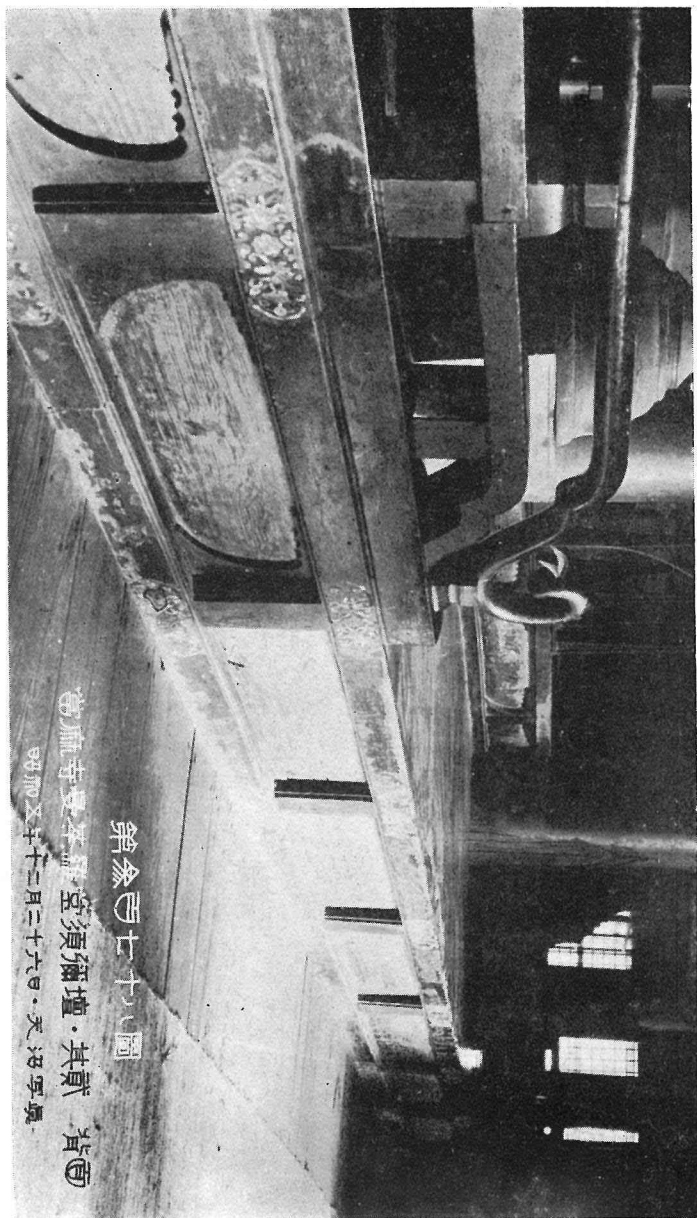
此形を忍辱山のもの(第三八〇圖)と比べてみるならば、其



第參百七十七圖

當麻寺曼荼羅堂須彌壇・其壹・正面

昭和元年十二月二十七日・天沼写真

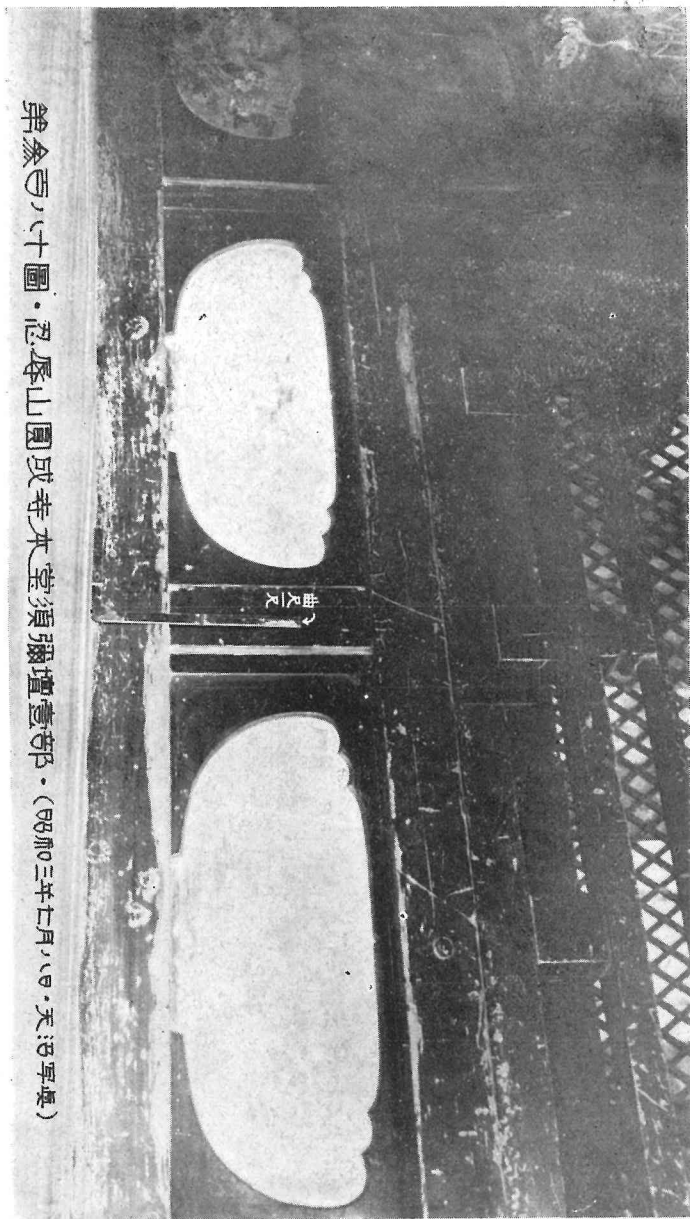


第參百七十八圖

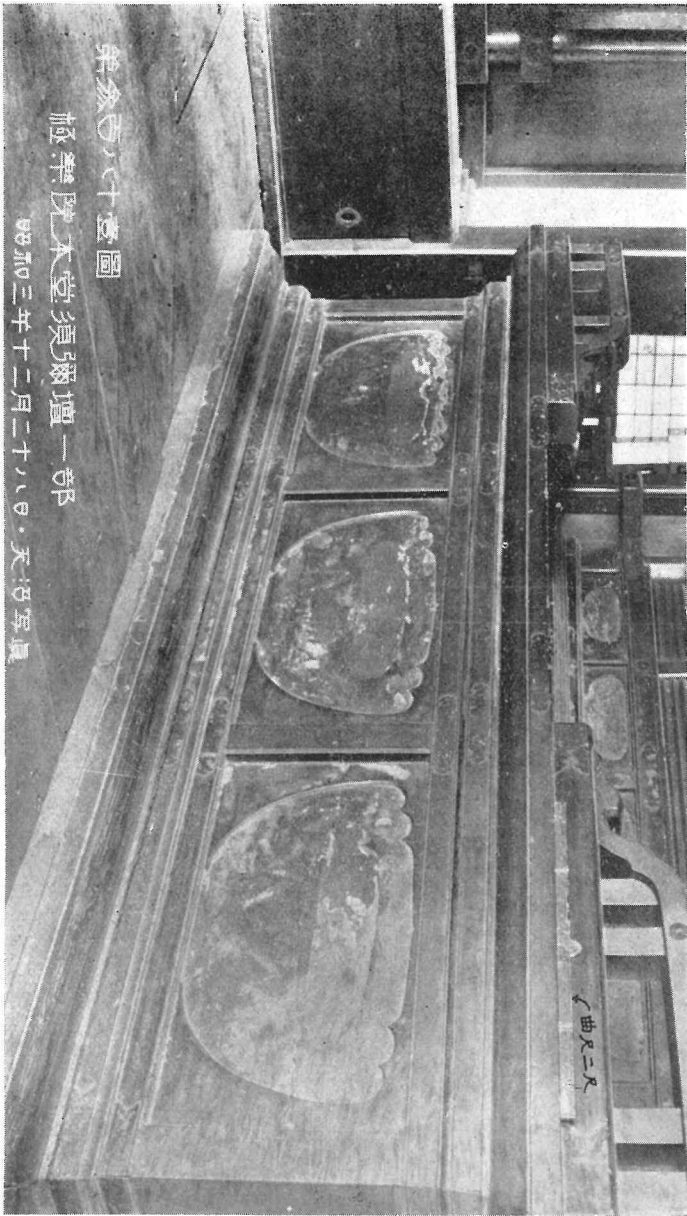
密麻寺 豐平羅堂須彌壇・其貳 背④

昭和五年十二月二十六日・天沼亨攝





第叁拾ハ十圖・忍辱山園成寺本堂須彌壇壹部・（昭和三年七月ハ八・天沼厚雄）

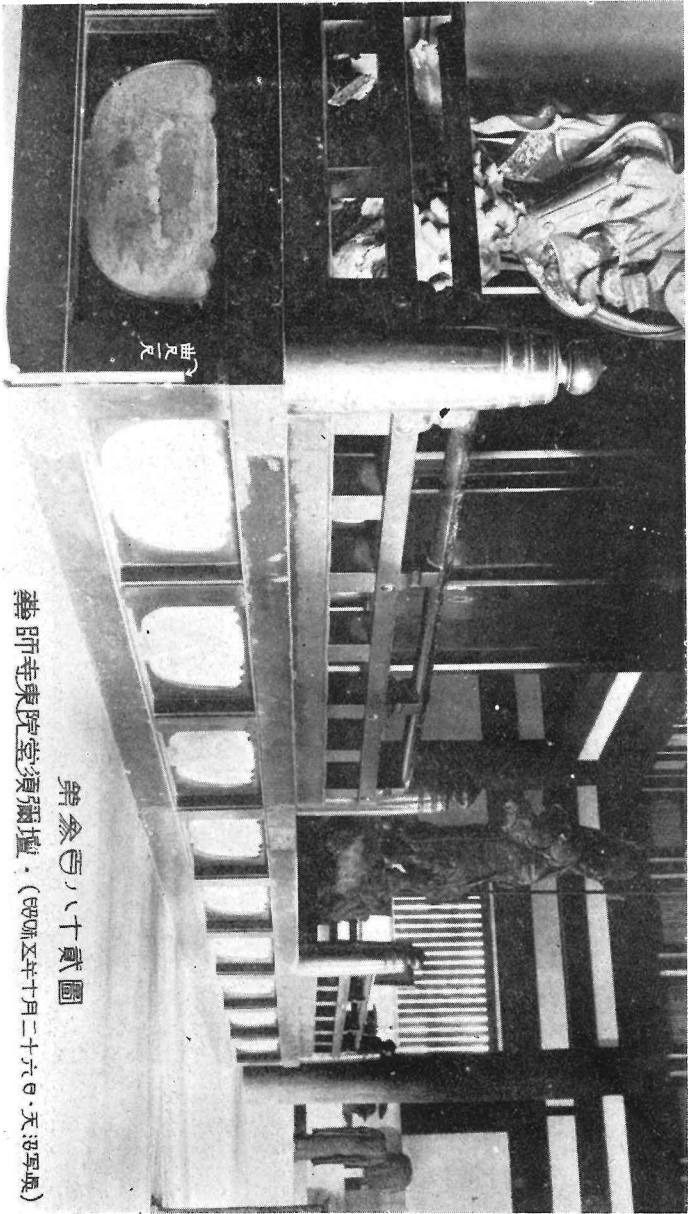


神奈川十景圖

板神奈川本堂須賀壇一部

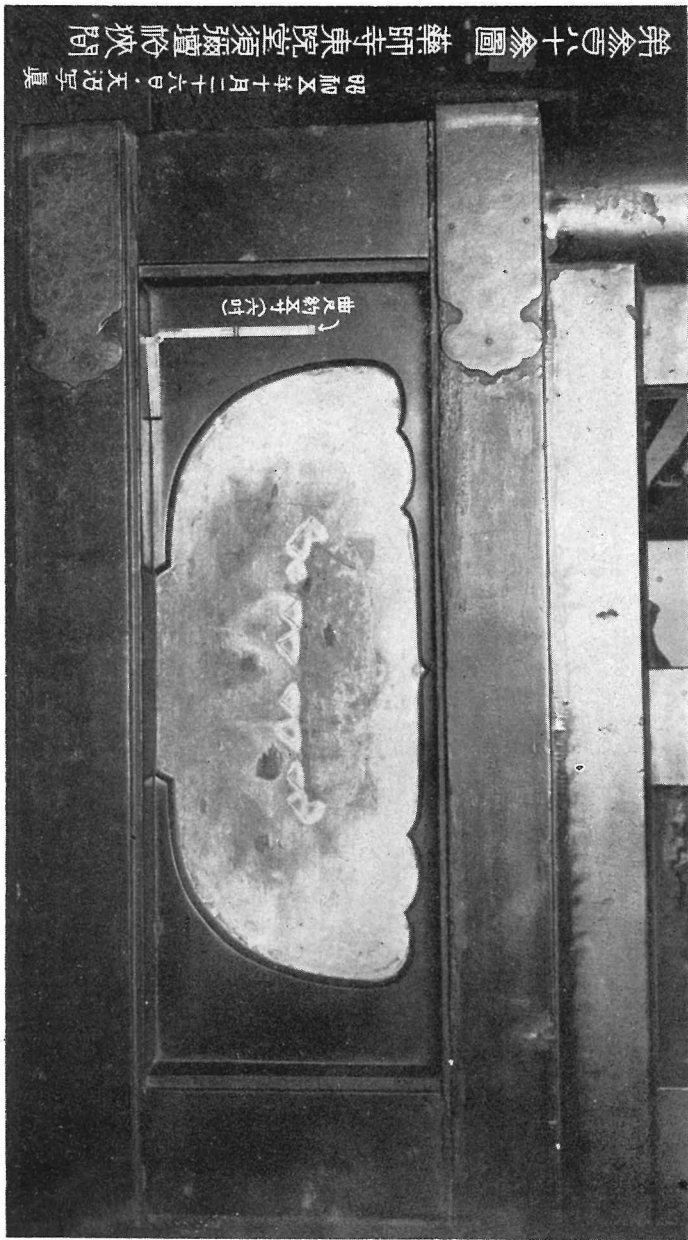
昭和三年十二月二十八日・天沼聖真

曲尺二尺



第叁百八十貳圖

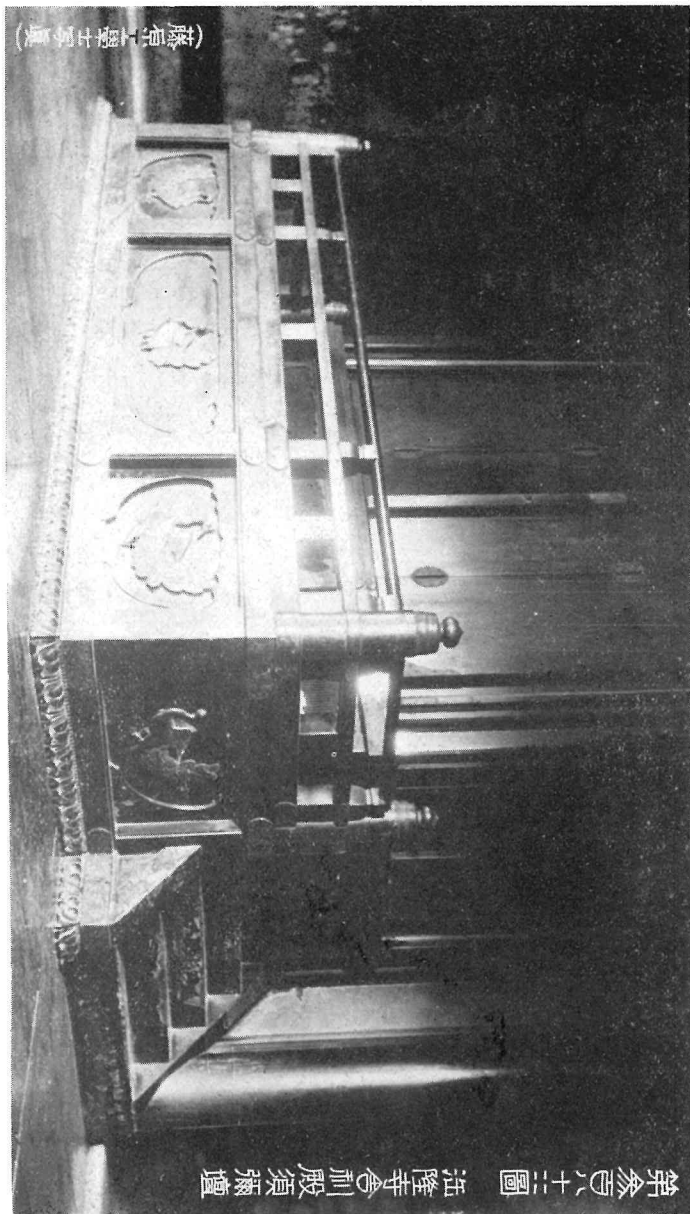
藝師寺東院堂須彌壇。(昭和五年十月二十六日・天沼厚典)



日本古建築研究の葉(卅八)(天沼)

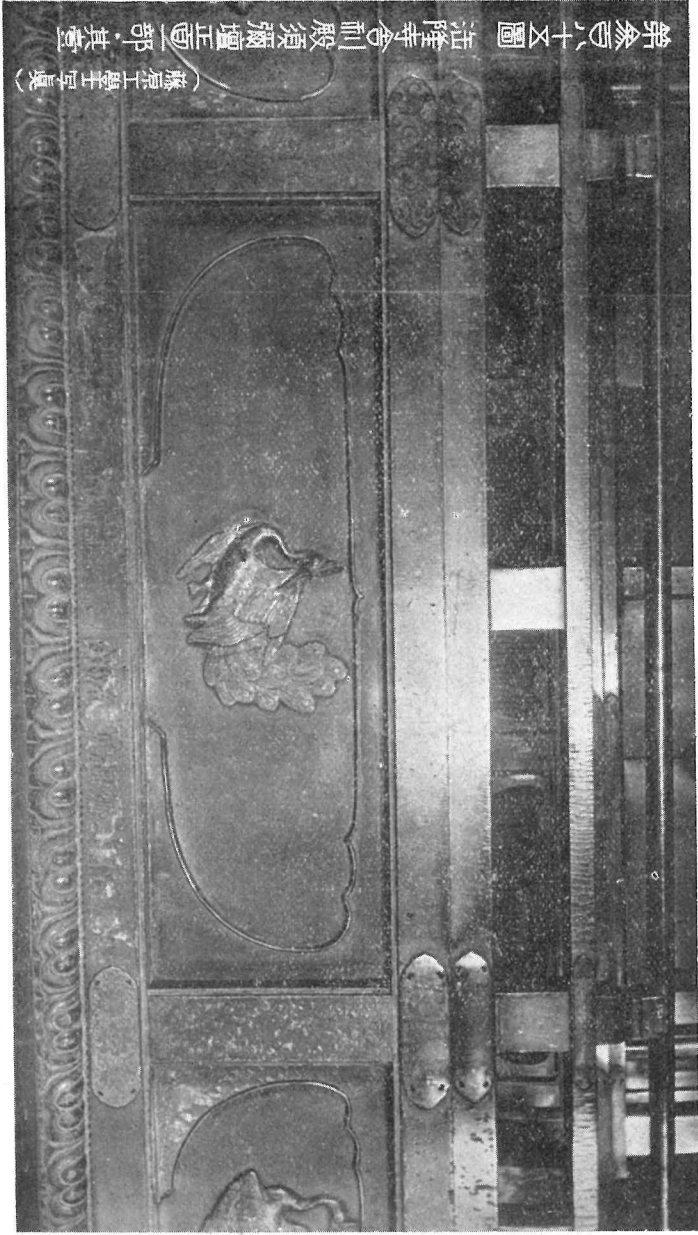
第十六卷 第二號

三一



図六十三 須彌壇舍利寺隆法

(藤原十郎)

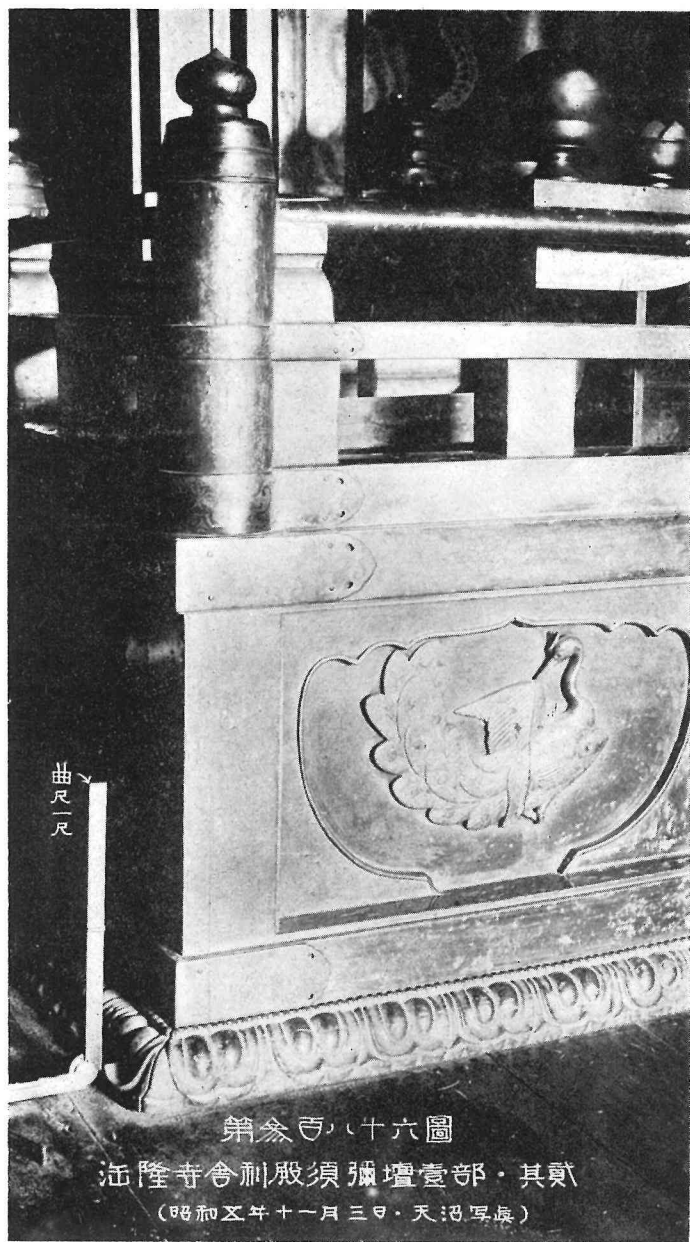


第六卷 第二號 三二三
 法隆寺金剛殿須彌壇三面一部・其壹
 (藤原上皇十一年)

日本古建築研究の葉(卅八)(天沼)

第十六卷 第二號

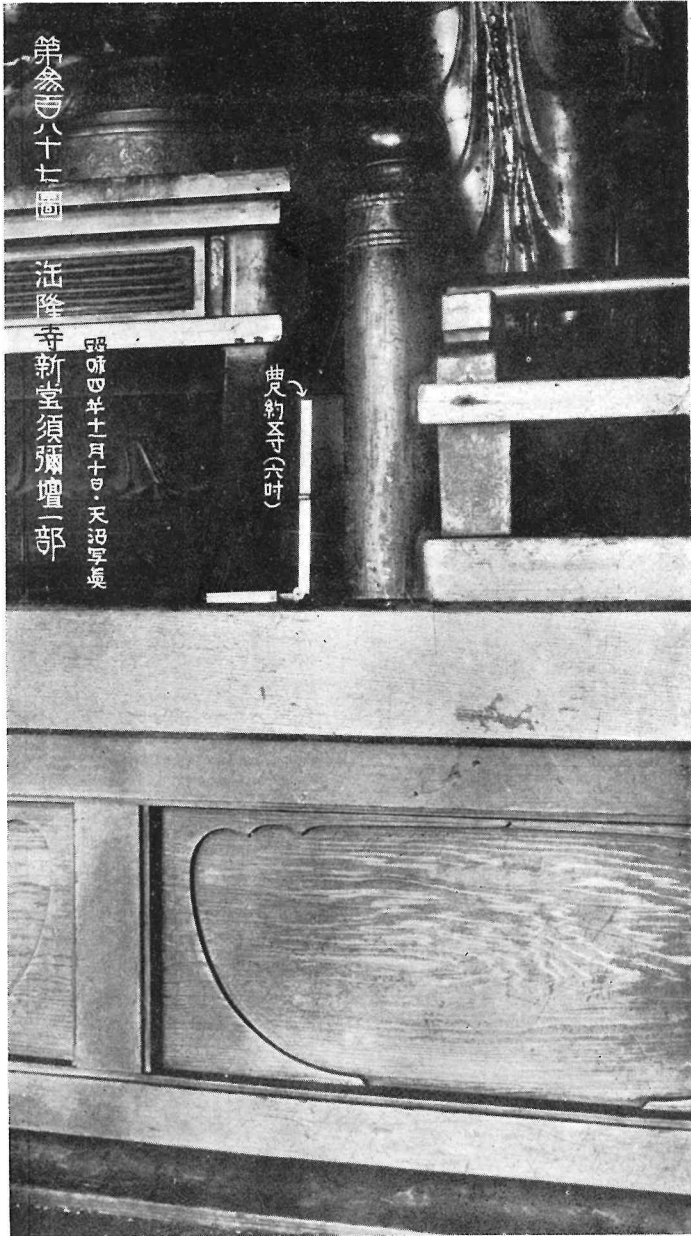
三二三



第叁百十六圖

沓隆寺舍利殿須彌壇壹部・其貳

(昭和五年十一月三日・天沼写真)

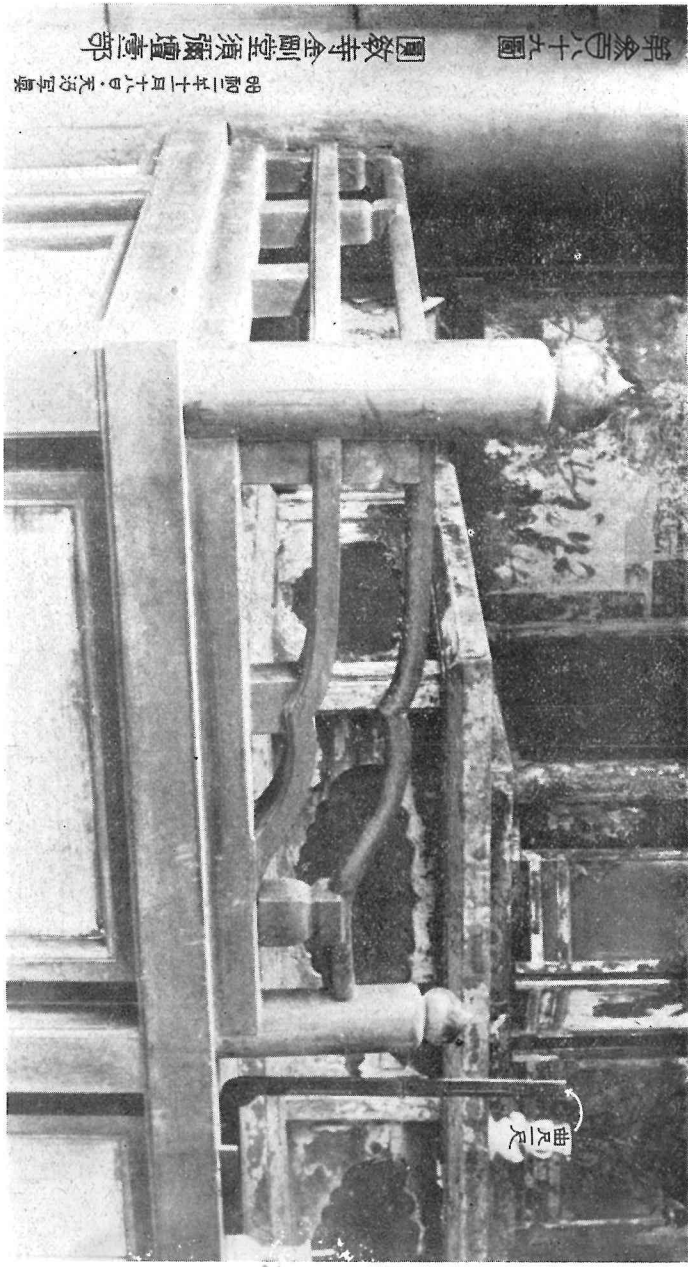


日本古建築研究の葉(卅八)(天沼)

第十六卷 第二號 三一五



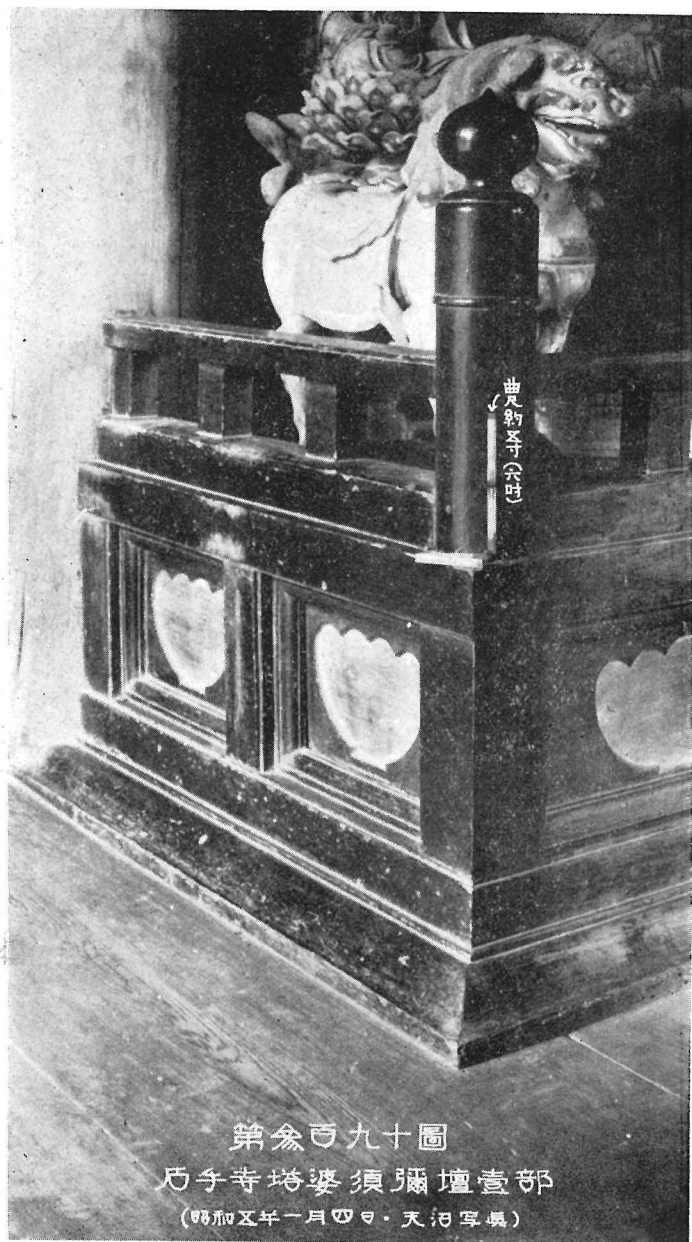
第叁拾ハ十八圖・元手寺本堂須彌壇一節・(明治四十年一月四日・天沼写真)



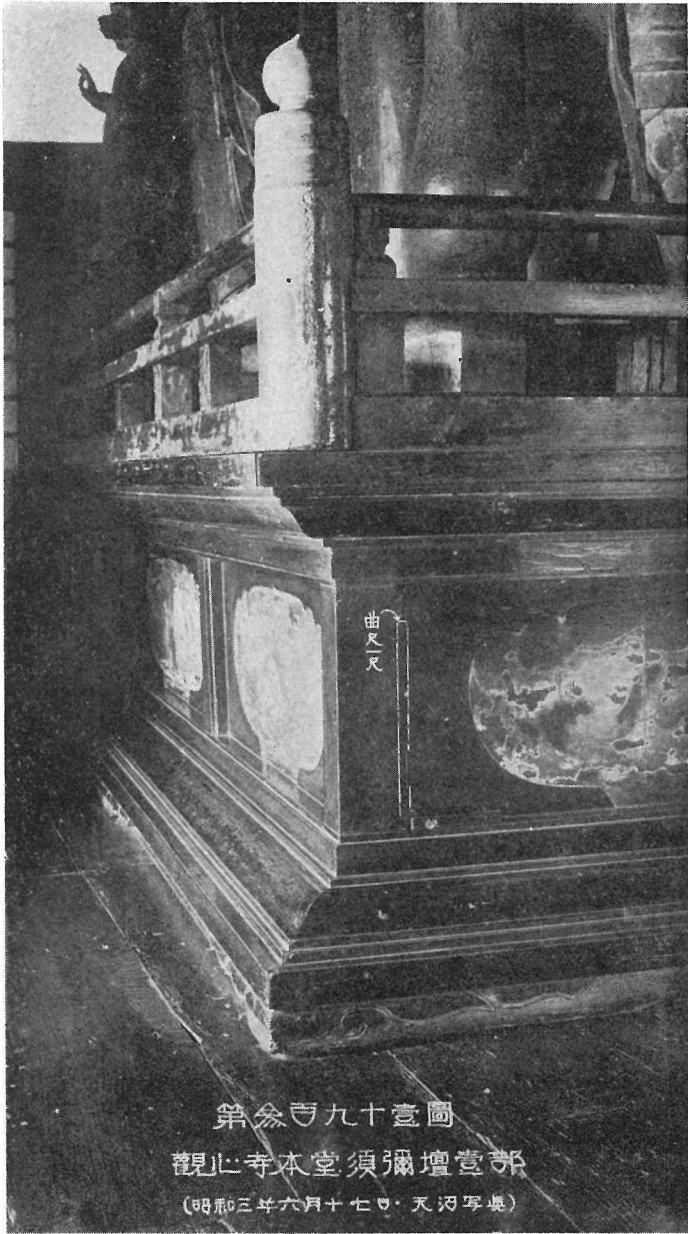
宗金六十九圖

圖教寺金剛堂須彌壇臺部

昭和二十一年十一月十日、天沼屋敷



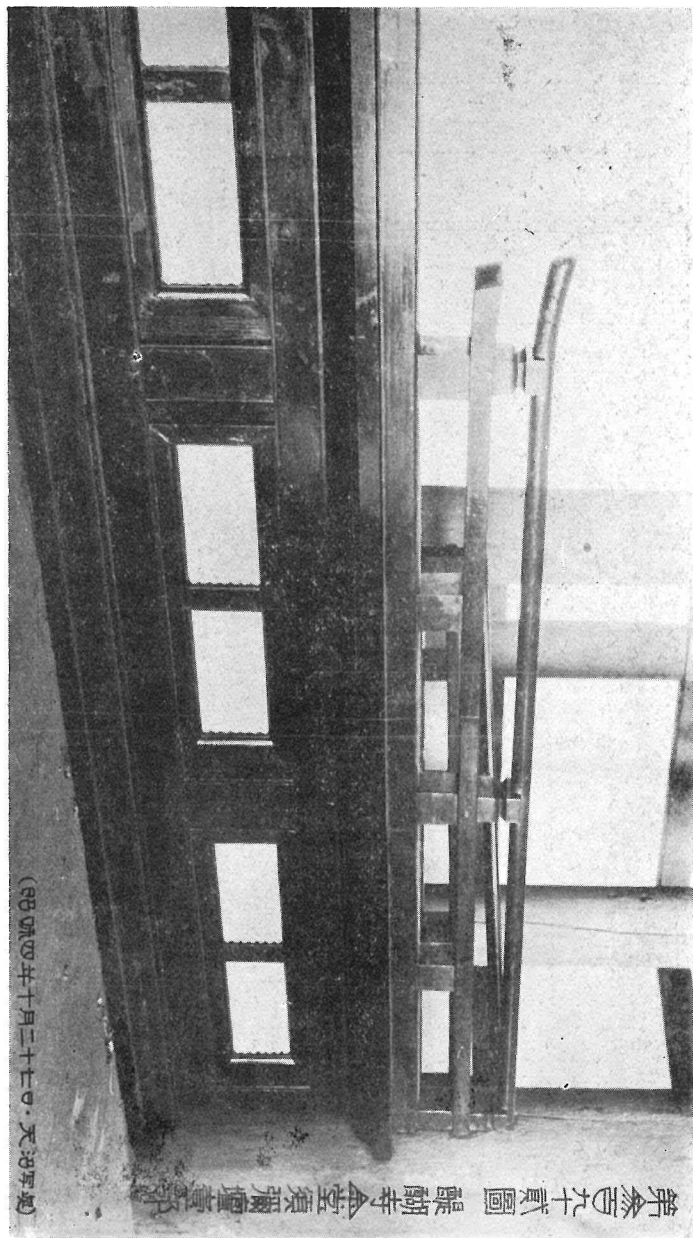
第九百九十九圖
石手寺塔婆須彌壇壹部
(昭和五年一月四日・天沼寫眞)

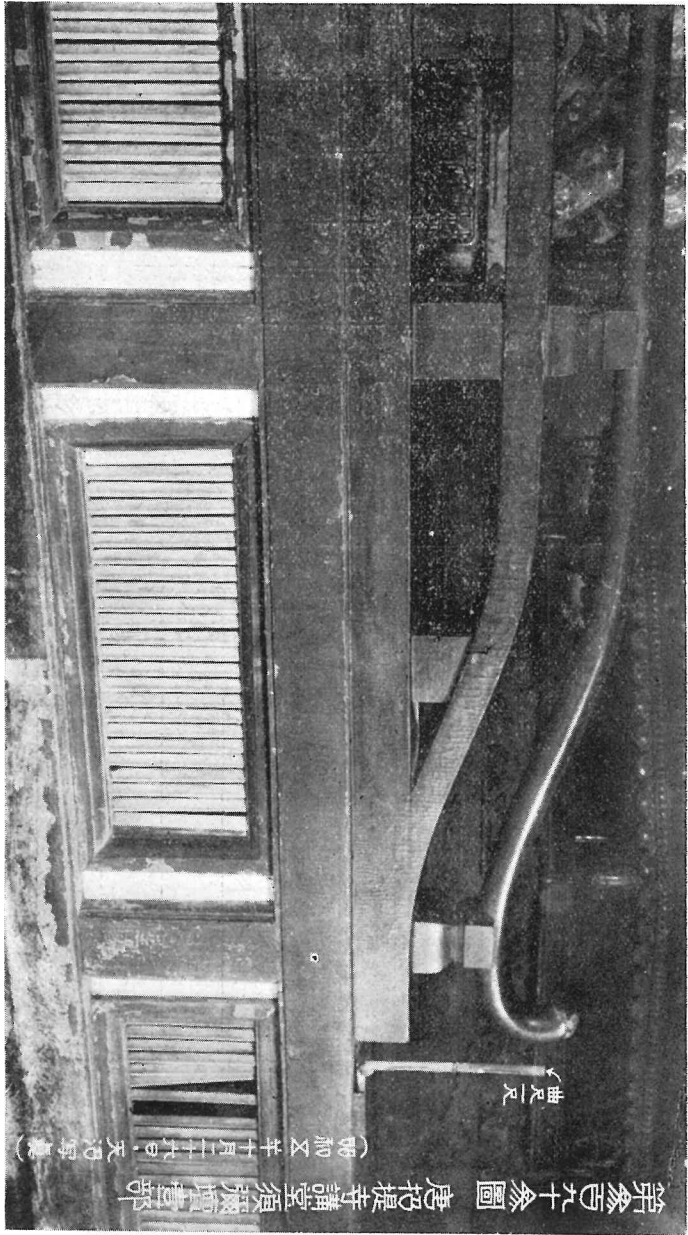


第九十圖

觀心寺本堂須彌壇壹部

(昭和三年六月十七日・天沼写真)





（昭和二十一年十月廿七日・天沼寺）

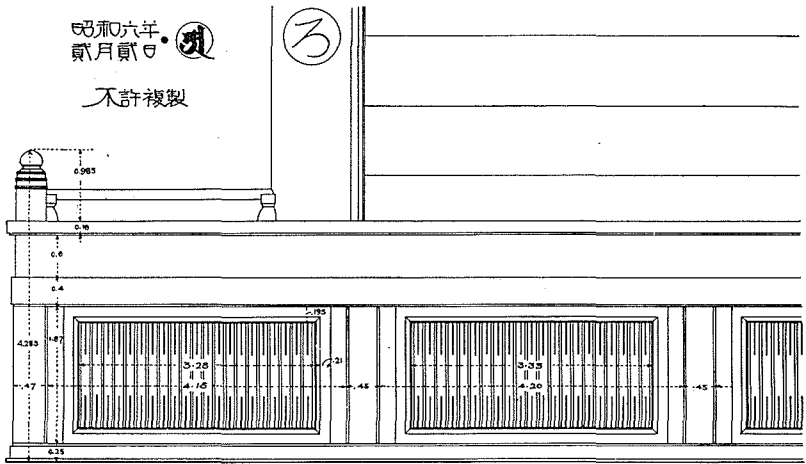
第參拾九圖 惠智提寺講堂須彌壇遺構

垂足（尺）

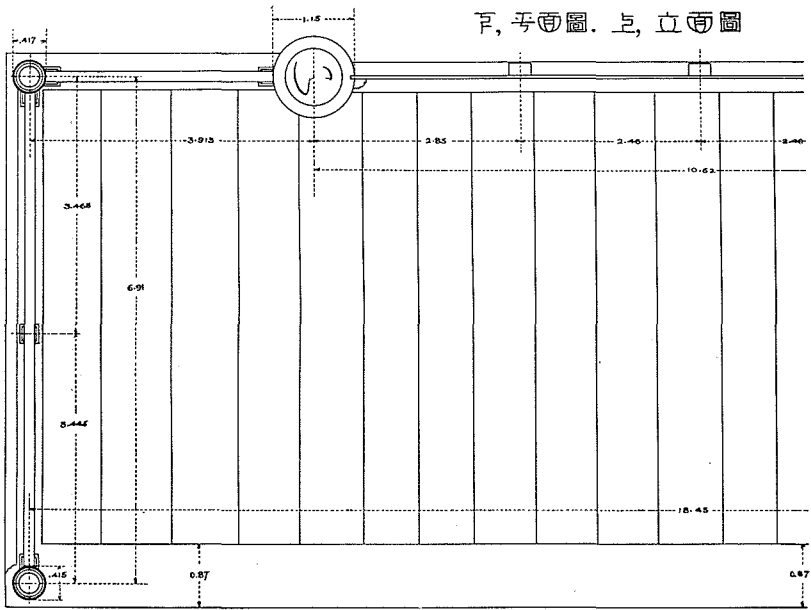
第參百九十四圖●不退寺木堂須彌壇之圖●其壹

昭和六年
貳月貳日

不許複製

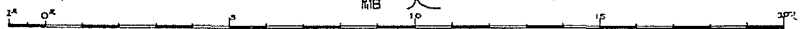


下, 平面圖. 上, 立面圖



須彌壇正面は勾欄なく、平桁に相當する水平狀の幅は、側面及背面の約貳倍とあり、供物臺を兼ねたる珍らしき意匠より成る。

縮尺

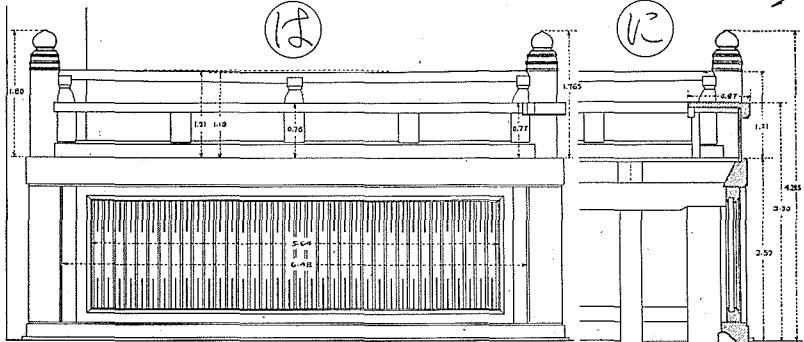


第參百九十圖●不退寺本堂須彌壇之圖●其貳

昭和六年壹月參●(卯)●拾壹日●不許複製

日本古建築研究の葉(廿八)(天沼)

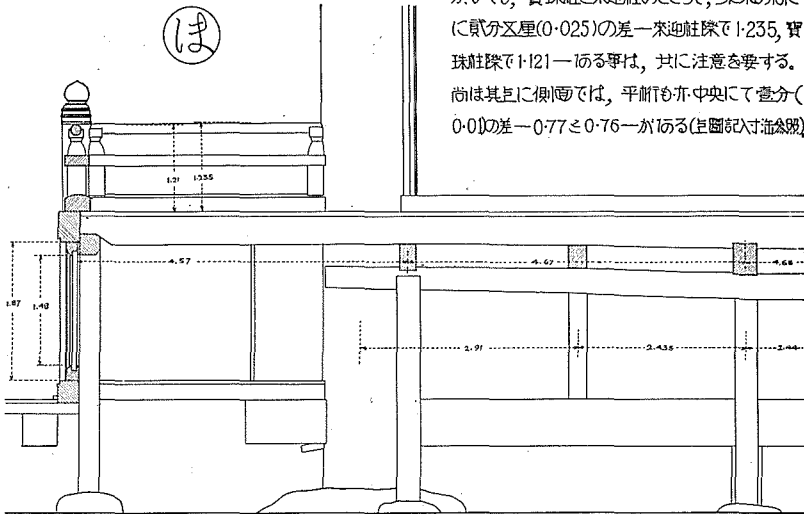
●勾欄の架木及平桁が水平でなく、中央に垂みがあつたり、一方が他がより低かつたりする例は、他にもあるかどう



側立面圖

か知らぬが、此場合側面勾欄架木が中央に於いて貳分(0.02)一寶珠柱際で須彌壇上端より架木上端を1.21、中央柱上端より1.19一尺けてある事、及背面に

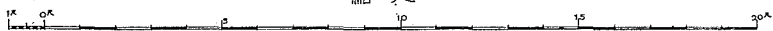
がいても、寶珠柱と來迎柱のところで、架木の高さに貳分五厘(0.025)の差一來迎柱際で1.235、寶珠柱際で1.121一ある事は、共に注意を要する。尚ほ其上に側面では、平桁も亦中央にて壹分(0.01)の差一0.77と0.76一がある(左圖記寸油參照)



横断面圖
縮尺

【注意】・特に圖に記入の勾欄架木。

・及平桁の高さに注意せよ。【注意】



第十六卷 第二號 二二三

輪廓の曲線に於いて大分の差のあることが看取できやう。それ丈け時代に相違があると思へばよろしい。此丈けみてゐると中々いゝが、あれ等に比べると、どうもいくらかおちるやうな氣がしなくもない。此も亦輪廓内に蓮花の横向きをかいてある。

第三八四・三八五・三八六の三圖は、何れも法隆寺東院舍利殿のである。舍利殿も繪殿も鎌倉時代である。床下まで入り込んで調べたことはないから、或は何か銘文でもあるかも知れぬが、さうしたらばいざ知らず、そこをらみたところでは、須彌壇もやはり鎌倉とみられる。尤も厨子は内部に貞治四年云々の墨書があるから少し後れるが、須彌壇はそこ迄は下らないと思はれる。

此は下框の下に更に展開せる蓮座があり、雄藥迄備へてゐる。尤もこれは既に中尊寺金色堂のに於いてみたのであるが、格狭間内の孔雀亦然り。さうすると、此も中尊寺の直系で、淨妙寺本堂須彌壇の兄弟分といふことになる。併し淨妙寺のは二羽で向ひ合ひ、且つ金銅製であるのに、これは一羽で或は右或は左を向き、木彫箔置で一

つゞく皆姿勢が異なつてゐるから、淨妙寺の分が何れも同一の形をしてゐるのに比べて、随分變化があるが、どういふものか前方をみてゐるのは一つもなく、何れも後ろをふり返つてゐる。中尊寺のはさすがにさう版でおしたやうではなく、前向きも後向きもあり、姿勢も一々變つてゐるから、全く面白いのである。やはり平安後期丈けのことはあるので、あれでは非難のしやうがない。

此孔雀は木彫のせいか、惜しいことに五羽とも兩足のところが缺けてなくなつてゐるが、それは勿論がまんのできる程度で、さう大した問題ではない。たゞ此壇に於いて特に面白いと思ふのは正面を三等分しないで、中央の間を特に廣くしたから、自然そこへ入つた格狭間は大に平たくなつてしまつた。夫れにも係らず孔雀を向ひ合はせにせず、他の間と同様に唯一羽にしてあることである。前には少しばかり孔雀の惡口をかけたが、この點は全くよく考へたことと思ふ。

格狭間には金銅の輪廓がとつてあるが、これはまことに適當な手法で、内に金の孔雀があるのに對し、縁が斜に

切つてあつて、其部分が朱でぬつである位では到底引立たないから、金縁にしたのであるが、此も既に金色堂にあり、淨妙寺にもある。鳳凰堂のにも恐らくあつたであらう。但しこれは格狭間内に一羽つづの鳳凰がゐるたかも知れない。牡丹に唐獅子の金屬板をとつてみると、釘孔位は残つてゐるかも知れない。

須彌壇は黒漆塗としてあるが、勾欄は朱漆で塗つてある。そこを金具其他で金色に光らせてあるのだから、できたては非常に美しかつたと思はれる。序ながら地覆下の展開せる蓮花瓣は側面についてゐる昇降段の最下段のところ、洵に巧なをさめ方をしてある。これは丁度かけになつてゐるから、寫真にも現はしてないが、實物をみる折があつたら注意すべきである。尙第三八一・三八六・三八九圖等の、下櫃と床との間にある波形の曲線をもつた長い木は、ほんたうは一つく蓮花をほるべきのを、略したと考へればよさうである。この様な曲線を用ひてあつても、唐様の影響等ではないのである。

第三八七圖は法隆寺新堂須彌壇の一部。此壇の各部の

日本古建築研究の乘(廿八)(天沼)

材料は極めてきゃしゃで、洵にあの堂によく似合つてゐる。あの堂が弘安七年にできたことは、棟札によりて知られるが、須彌壇もよく似合つてゐるから、勾欄と共に初めから此堂に用ひられてゐたと考へられる。併しながらさうすると、兩端の羽目板が半分にきれ、從て格狭間も同様半分になつてゐるのが問題であるし、さうでないとする、當初から他のをこゝへ間に合はした際、大きさが合はないため途中から切斷したとでもするか、何とかせねばどうも工合がよくない。天井だつてさうで、壇上が反て簡単な格天井となり、外陣にあたる所の上が小組格天井にしてある。これ等も其逆でありさうなのに、どうしたのかと思はれるものゝ一である。

とにかく羽目板の格狭間は形がいゝし、勾欄親柱は寶珠も一木からくり出して二節あり、其他よく時代はあつてゐる。ただ上櫃と地覆との間に入つてゐる幅の広い木が少しく變に思はれる丈けのことである。

第三八八圖は伊豫道後の石手寺本堂のものゝ一部をだしたのである。本堂は本間は五間五面入母屋造鎌倉時代

第十六卷 第二號 三三五

の建築であるが、内陣の須彌壇亦同時のものと思はれる。

殆んど總ての場合、床の上に(展開せる蓮瓣の)下框を置いてあることは、既に列舉した例で讀者讀君は承知して居られることと思ふ。然るに此場合には、圖でみる通り地覆長押をおき、其上に下框をのせてゐるところ、珍しいといへる。羽目板の格狭間の形も餘程變つて居り、輪廓の斜になつてゐる部分の幅が廣いのと、兩肩の三つの茨の間が接近してゐるためと、其間の曲線が著しく圓味をもつてゐるのと、上方に茨を向けた中央の部分が割合に長いので、大分に形が變つて見える。さうして其中には、厚肉彫の唐獅子を一疋づゝ入れてあるが、これも一つづゝ形が異なつてゐる。

格狭間の中に獅子を入れることは、いつ頃から始まつたが知らぬが、此時代は既にあつた事は、此例及び金剛輪寺本堂須彌壇(次號に圖示す)等によりて知られる。後になると牡丹があしらはれ、そこで牡丹に唐獅子ができてくるのである。

第三八九圖は書寫山園教寺金剛堂のもの。先年この勾欄を盗んだものがあつたので、此寫真に寫つてゐるのより他に見られないかと思つた所、後に盜人が捕へられ無事に元に戻つたといふことである。寶珠柱に飾が一つもないところは、見たところ少しく奇抜過ぎる。

此須彌壇は、下の方が寫つてゐないが、實は此は勾欄を記載する時の要意にとつておいたのだから、下の方はなくともよかつたが、夫れを壇の方に間に合せることになつてきたため、少しく體裁がよくないのである。

體裁はまづいにしても、壇の形は判つてゐる。即ち普通の形で、羽目板にはたゞ額縁丈けを入れてある。どうもこれでは少し淋しくて物足りなくはあるが、何もないのよりいゝ。此建物は【特建國寶目錄】に室町となつてゐるが、私は南北朝頃のものと思ふので、こゝに入れておいたのである。

第三九〇圖は石手寺三重塔初重ので、羽目板額縁の中へ格狭間を入れてある。従來の例では、額縁の中は大概縦か又は横の連子で、格狭間を入れたのは殆んどなく、

つまり格狭間を入れるならば、周圍に輪廓はつけなければならない。ところが夫れでは類例多く至極平凡だから、此際變つた意匠を凝したのかも知れない。

其上に格狭間の形が甚だ特殊である。夫れは正面についてゐるのは、上部中央の部分に、上方に尖れる茨を缺き、側面のは同じく上部中央に、上方に向ふべきのが下を向いてゐる。それから下の平たいところ、何といふ名か知らぬが、茶碗や鉢なら糸底に當るところの形も、少しく普通と異つてゐる。だからみたところは、大分變つた感じがしてゐる。第三八八圖にだした本堂須彌壇でも、またこれでも、兩方共餘り他で見當らない形をしたものを用ひてゐる。勾欄亦略式、寶珠後補。

第三九一圖は有名な河内の觀心寺本堂の壇。此も羽目板へ格狭間を入れた丈で、極めて普通の取扱がしてゐるのだから、夫れ丈けならつまらないが、第三八一圖に掲げた極樂院本堂のを、もう少し込み入らしたやうな縁形を、壇の上下につけてある。また隅のところには裝飾のための脚がつけてある。勿論此脚丈で此壇をもたせ

ることは不可能であるが、どうして此の様なものがこへで、きたのであらうか。

此はどうも唐様の影響らしいのである。後に圖示して解説をするが、唐様の須彌壇に於いては、上下に込み入つた同じやうな縁形を反對にくり返へすのと、下にこの様な飾の脚をつけるのが特徴である。有名な和唐折衷建築丈けあつて、この邊へも少しばかりで、きたと考へてもよろしい様である。

第三九二圖は醍醐寺金堂のもの。慶長三年豊臣秀吉が紀伊の湯淺から移したといふことだが、建物が鎌倉時代のものであることは様式手法が此を證してゐる。こゝにだしたのは其須彌壇で、修理ができ上るか上らぬか位の時、まだ佛像は一體もおいてないうちにとつた寫真で、壇をみるためには至極都合がよろしい。

下框の下のは蓮瓣と雄藥とを略したとして、然らば上框の上のは何かといふと、これは下框の下のを上框の上につけた丈で、蓮瓣が畧されたとみるよりは、上にもつけてみやう、といったやうなところから、くり返したの

であらう。

其間に狹まつてゐるところ丈けをみると、普通の和様の壇と何等變つた所がない。たゞ束の間隔が廣く、其爲め額縁内の横連子も長過ぎる虞があるから、そこで中央へ束をたて、二連とし、以て恰好をとつたのであらう。全體として大分形が目新しい。

これ丈け記せばいゝのであるが、此際も勾欄に就て一言述べておき度い。此勾欄は側面の方は何でもないが、正面は地覆丈けが柱から柱まで、壇全體に通じ、其上の架木と平桁とは、圖でみる如くはねてゐる。同じやうな目的のために第三七八圖や次圖のやうになつてゐるのはいくらでもあるが、純和様ので而も地覆丈けを通したのは、恐らくこれ丈けであらう。だから例へ勾欄が全部古いまゝでないとしても、かゝる手法によりて一層珍しく見せてゐるのである。

第三九三圖は唐招提寺講堂の須彌壇の一部分である。

此も羽目板に連子入のであるが、他の殆んど總てが旨の横連子であるのに、此は縦で而も間があいてゐる、だから

ら床下の通風にはいゝが、この様に壞れてくると少しくきたならしい。それはとにかく、床がたゞきのところへ木製の壇をつくる時、かうすれば通風が自由で都合がいゝ筈である。

此壇はどうみても鎌倉式である。さうすると講堂ができたときからのものでない事は確かといへる。さうすると講堂に大々的の修理を加へたときか、又は本尊彌勒如来を弘安八年に造立したと同時に、此壇をつくり、又天井も光背を樂に入れるため、折上小組格天井にしたのであらう、といふ見當は容易につくであらう。

此場合は、既に記したやうに羽目板額縁内の連子と、勾欄の架木や平桁が充分のびてゐて、形のいゝ曲線を形づくり、法隆寺聖靈院内陣厨子上の唐破風の曲線をみるやうな、甚だ落着いたのび／＼した氣分になれること、を見逃してはならぬ。

最後に不退寺本堂の夫れを圖面で示しておく。

第三九四・三九五圖で一通り盡してゐるつもりである。來迎柱の間隔は十尺六寸二分であるが、壇は其兩方へ三

尺九寸一分五厘(寶珠柱の中心迄であるが)はみだしてゐる、さうして上下権間を正面は四つに區劃し(其幅が中二間と兩脇の間と極僅かの差のある理由が判ぬ)、側面は一間とし、羽目板には前例の如く、間のすいた縦連子を入れてゐる。須彌壇としてはこれ丈けの事である。

實は夫れから上が面白いのである。夫れは正面に於いて勾欄の地覆と架木とを省き、平桁と上権との間に板をはり、平桁の幅を廣くして供物臺を兼ねしめたので(第三圖⑨・第三圖⑩・第三圖⑪・第三圖⑫)、此が全く珍しい。さうして正面平桁の供物臺は、側面に巡つていつて、内側はいゝが、側の幅さを減ずるため、二つばかりし、くりをつけて、そこをうまく納めてゐる手際は甚だよろしい(第三九四圖⑬・第三九五圖⑭)。

尙ほこの壇に於ては、何故か勾欄の架木と平桁とを——例へ極く僅かでも——反らしてゐる。偶然さうなつたのではなく、態々反らしたものとほか考へられぬ(第三九圖⑮及其解説)。親柱の高さや擬寶珠の大きさに少し位の差があるのは、全體が木で造つたものだからその位のこととは仕方ないとしておいてよろしからう。

* * *
次號にもう少し和様須彌壇の例を引いてまとまりをつけ、さうして唐様及び天竺様らしいものに及ぼし、第四號に江戸時代迄のを記して大尾とするつもりである。

昭和六年三月三日稿了。